

いぢぢぢの土でいぢぢぢ作るんか?!

静岡県は米の消費県である。ここでの米専作は米どころとは異なつた経営戦略の下に営まれる。鋭い経営感覚で水田借り受けを進め、天竜川河岸の灰色低地土地帯で米専作を営む静岡県磐田市・柴田好弘さんの場合



請負を少しずつ拡大させながら、その数が増えていった精米機（写真上）。天竜川によって運ばれた砂利の層は、自然の状態でも場所により、掘ってすぐの深さにあったり、1m掘っても出てこないほど深くにあったりと異なるという。（写真左下）は河川よりの圃場で、そこでは砂利が深くにあり、排水性のよい灰色低地土の断面が見える。（写真右下）は河川から離れた圃場。15cmほど掘ると、スコップが土に入っていないほど砂利がぎっしりつまっている。



柴田 好弘さん

〒438-0005 静岡県磐田市匂坂上687

☎0538(30)1869

関 柴田さんはウナギの養殖からコメ作りに転換されたわけですが。

柴田 はい。ウナギをやるためにこの地所を買い、農業の資格を取ったのですが、ウナギの景気が悪くなって水田へと転換したのです。

関 そういう人の方が、かえって田圃が冷静に見えるのではないのでしょうか。

柴田 そうですね。ウナギで3千万円を2人で売り上げるのは楽ですが、農業で3千万円上げるのは大変なことです。しかし逆に2千万円上げれば、経費がかからない分だけ残ります。そういった意味では、農業は売り方一つでかなり違うものです。1億の売上でも、経費や設備に9千万円かけるのであれば、2千万円売り上げて1千万円残る人とどちらがいかいと言うと、後者の方がよくなっ

てしまう。前者はよりたくさんの仕事をしないといけなくなるからです。

関 特にお米を数反の範囲でやっている人というのは、経営とは言い難い状況です。だからかえってお米で勝負しようと思う人はこれから面白いのだと思います。ただ、コストの問題でどこまで下げられるかということがある。

柴田 コストの問題では、外国と競争しても絶対勝てないので、生き残る方法は、地域との関係の中から出てくるのではないかと。逆説的に聞こえますが、私にとつては2反3反やっています。1町歩ある人は、自分でやるという計算をするとかえって合わない。例えば、自分でやると1反当たり7万円のお金がかかるとすると、1町で70万かかる。70万払わないといけないし、それ以上でお米を売らないといけない。ところが2反3反の人たちは、自分で食べる分を自分で作るだけです。出費も20万30万ですむ。返って大きな規模の人たちが止めて、小さい規模の人たちが作り続けているのです。ここは米どころではないので、若い人たちもやらないし、仕事が大変なら全部貸してしまえとなる。無理に流動化しなくても自然となる。

関 米どころでは、やはりお米や土地に対しての執着心の違いですかね。

1町2町でもやっていけるからでしょうか。

柴田 それくらいでやっていけるのが理想ですが、前は3万円で売れたものが2万円になり、今は1万8千円になってきた。1万円の時に2万円では売れても、3万円では売れないですよ。

関 そうですね。

柴田 経営的に一番いいのは、転作も輪作もできることでしょう。ここは圃場がとびとびにあるので、国が言うところの集団転作ができる場所ではないんです。ある程度面積があれば、半分休んでもその間にその地力を上げると考えればそちらがいい。

関 手間は一緒ですからね。

柴田 水田経営は面積ではなく、田圃の枚数ではないかと思うのです。1反の田圃なら百反、1町の田圃なら百町歩、そのくらいならなんとかできるのではないのでしょうか。ただ、苗を植えるという部分においては、1枚が大きいと多少初期の段階で無理があるのも事実です。風の強い日などは田圃の片方の水量が多く、もう片方は水がないという状態になりやすいのです。平らでも風止めの工夫をしないとダメ。植えてから2、3週間はやはり子守をしてやらないと。

関 まだ活着していない苗が風下に流されてしまうということですね。特に

柴田さんの圃場のような砂壤土では、粘土質土壌と比べると、押さえてあっても苗がもつていかれてしまう傾向があるかも知れませんね。レーザーブレード、乗用コンバイン、この数の精米機、これだけの設備を稼働させるにはそれなりの面積をこなさないとならないのではないでしょうか。

柴田 はじめからこういった設備を入れていたのではないのですが、それを想定しながら先行投資をしてきたのです。ウナギをやっているときにも田圃をやりながら裏作の麦も作り、畑にも麦を作つてその後サツマイモをやつた。その中で、機械的に少し余裕を見ておけば、他から要望があつたときに、ぱつと仕事ができとお金が入るといふ形ができてきた。そうすればその分を機械の償却に回せます。そうして一台一台増えていったのです。此の地域はそれができる場所なのです。総てを任されてしまうと、自分でお米を売らなると最終的にお金にならない。ところが田圃を耕したり、収穫したりという部分だけを請け負えば、機械が動く分くらいはお金が回ってくる。

関 どの作業の請負が多いのですか。

柴田 比重的には耕うん作業と稲刈り作業が多いですね。田植えは相手の苗の都合で動かないといけないので、基本的にはやりません。相手の苗の都合

で動くと、自分の苗がおろそかにな
りますから。

稲刈りも、置ける稲、置けない稲、
早く刈らなければならない稲とありま
す。倒れていけば、青くても約10日
内で刈らないといけない。それを後
まわすと、刈りにくい上に、泥まみれ
のものを無理に起こさないといいな
くなるので、機械の負担が大きくなっ
てしまう。それでは、割増料金をもら
しても機械の整備に比べ合わなくなり
ます。刈り取りの順番も、まだ稲がし
かりしているから1週間後でもいいな
と見てあれば、他の倒れたところを先
にやる。すると、同じ1時間でも効率
が全然違うものですよ。

関 品種は何種類くらいやっておられ
るのですか。

圃場・改善のポイント／土のしくみ・はたらきを知る

農業に経営観が育っておら
ず、実感としては生活に潤い
を求めている趣味に過ぎない
—— 稲作農業はそんな風と言
われてはいないでしょうか。

最大の特長として乗用型で
65万円ということ掲げている

とめばれ、夢つくし、ひのひかり、あ
いちのかおり、するがもち、それと黒
米です。

関 施肥はどのように。

柴田 今是有機米の契約栽培が多いの
です。それが始まってからは、川合肥
料(株)のボカシ大王が主体です。それと
米糠、籾殻、稲藁は圃場でとれたもの
を全量還元している。

関 元肥で。

柴田 ペースト肥料を元肥にして、追
肥にボカシを入れている。

関 ペーストだと肥料ロスが少ないで
すからね。

柴田 ムラが出にくいですから。一発
の肥料だとムラが出やすいのです。

関 化成肥料に比べるとボカシは量が
多いので補肥作業は大変ですね。

柴田 そうなんです。

ら、今度はプロ並みの乗用型

に乗って楽しい田植祭りをや
りませんかという問いかけに
聞こえてしまつたのです。

農業経営という観点からす
れば、稲作農家の半数近くを
占めている、販売総額が50万
円以下の農家では、経費を差
し引いた残りでは労賃も手当
てされないことは当然です。

関 背負いでやるのですか。

柴田 去年から乗用の防除機の後ろへ
肥料散布機を付けてやっています。プ
ラウイングをするので、背負ってやっ
ていると更に大変になる。ですの
で、プラウイングも毎年1年おきにや
るように変えたのですよ。

関 西南暖地のコメは8俵以上取ると
味が落ちるよと言ってくれた人がいま
したが、どう思いますか。

柴田 収量を落として味をよくする
ということを私もやっていますが、もう
一歩進めて果物の完熟と同じように完
熟米ということができないかなと思っ
ています。3年くらい前、植物に傷を
負わせたように錯覚させて抵抗性を強
めるアグリボ(資料請求番号164)と
いう資材を使っているところから、怪
我をしたので刈ってくれと10月25日に

ここに新規の農機が導入され
るということは、稲作以外の
収入から農具を調達すること
を意味します。

これでは成り立ちませんと
いうことを長年成り立たせて
きたわけです。

しかし、逆にこういう楽し
み優先の農業は、今後もそれ
ほど減少しないのかも知れま

せん。

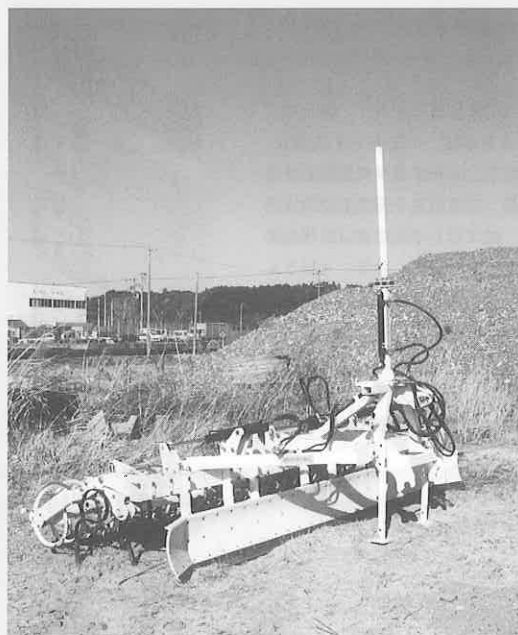
関 晩稲の品種において、適期を長く
してもコメの味を作れるというのは経
営的なヒントですね。コシヒカリのよ
うな早稲の品種では、8俵取りがよい
ということなのかも知れません。

このような背景があると、
稲専作経営はそれがどんな農
業基盤の上にあるのかという
ことよりも、どんな米消費型
の地域にあるかということの
方が経営安定化への要件にな
るのではないかと考えます。
その根拠は、消費型の地域で
は、米の小売りが比較的やり

やすいことと、兼業農家については東北や北陸の米どころと違い、土日の休日返上での農作業を近年特に嫌う傾向があり、田圃で働いても小遣い稼ぎにもならないものなら全部貸してしまえという貸し手が、少しづつ増えているということがあります。それに対して以前本誌44号で取り上げた山形県遊佐町のような米どころでは、ほとんど貸し出す田圃はないということでした。その経営的悪条件に比べれば、今回訪問した静岡県の場合、地元県内での生産量は県内需要の1/4しかなく、あとは他県から買い入れている消費

県なので、稲専作は米どころとは違う戦略で優位に立っていることとです。

ここに登場する柴田さんは、先代のお父さんが鰻の養殖業を手掛けていましたが、餌の高騰、出荷価格の頭打ちなど、この業界全体が下降線をたどり始めた時に、鋭い感覚で次の事業を模索し、非農家ではあっても農業を冷静に見て、水田借り受けを少しずつ進めていったということとです。柴田さん自身の口からは、条件の悪い水田が地主の事情やあきらめによって貸しに出されるので、それを借り受けて今日まで来たということとです。



レーザーレベラーは、土が乾いている時に、天候の合間をみながら稼働させなければならず、搬送を他に頼んでいたのでは期を逸することになりかねない。柴田さんは、自らトラックでレベラーを搬送することでその稼働率を確保している

この一帯は天竜川という一級河川が運んだ砂利層の上に典型的な灰色低地土が分布しているところで、稲作は水持ちの悪さを除けば大変取り組みやすい土壌条件にあると言えます。土の善し悪しというと、良い土とは肥えているとか、土層が厚いかという考え方もあります。勿論そのような肥沃度の高い土の生産力が高いことも事実です。しかし、粘性が弱く、腐食を多く含まない、しかも土層が薄い縦浸透が大きい、肥沃度の低い土は、施肥管理や機械作業の効率という点から考えるとメリットとなるのです。水温の上昇不足はそのデメリットとなるとしても、それは西南暖地では、それほど悪影響与えません。それよりも、酸素の供給が円滑に行われることで根は活発に活動し、肥料の吸収効率も高く、作物体自身も成分を過度に吸収してしまいうこともなく健全に育ちます。これが一般に、河川下流域に発達分布する灰色低地土一帯で米の品質が良く、食味に優

れている原因と考えられます。こんな良質米の生産基盤によって、柴田さんはその販売においても近距離のお得意さんを得て、借りる水田面積が増える分次の投資が見えて、拡大を続けることができたということとです。しかしこの拡大も面積を集約した場所で借り集めることができたわけではないので、作業口数が多いことも事実です。そこで柴田さんは皆に先駆けてスガノのレーザーレベラーを導入し、不陸修正をして、代かき、田植え、その後の水管理、雑草抑制と積極的に水田を一律に管理できるようにしています。導入3年目において水田管理合理化に最も貢献したのは、畦を除去しての水田大区画工事や次々と実施したことだと述べています。

ただし、大区画圃場に替えることが良いことづくめかと言うと、問題もいくつかあるようです。まず、代かき後は大きな池と同様、風の強い日には風下では大波状態となり、田植え2週間位まではまだ活着しきっていない苗を引き抜き、風下にプカプカと寄せ集めたようになってしまいうこと。この傾向は、粘性の弱い灰色低地土で顕著に出てしまします。次にレベラーで表層土を運土して、低い場所に置いていく作業をすることで、雑草の種も一カ所に集められ、そこはかなり雑草で苦勞をさせられるということとです。そして、レベラーの目的である均平は、その工事をし終わった段階では勿論素晴らしい不陸修正ができるのですが、運土して盛土部となったところの沈下がその後かなりあるようです。これはレベラーをかけるときにそのクセを把握して、その沈下する分を考慮に入れた盛土部を完成させていくしかないのかも知れません。

また柴田さんは、レベラーの個人所有は無理があることも実感しておられるのですが、先駆者利益はそれ以上にあるということも話しの中から伝わってきました。